

2級【シーチング組み立て】傾向と対策

色が付いていない箇所は常に気を付けていただきたい箇所となります。青く印した箇所は今回のデザインで関係ある箇所です。

シーチングの組み立ては、ただパーツが組み合わさってればいいわけではない。業務として考えると、他の人が見て実物の商品が想像できるものでなくてはならない。デザイン画にあるパーツ全てそろえるとともに、実物の形状と同じ形に組むことが最も大切なことである。普段から繰り返し練習を重ねてシーチング組み立ての完成度を上げていただきたい。

以下の項目は、求めているレベルに達していない又は未完成のため不合格の対象となるので注意する。

- ① シーチング組み立ての着せ付けの不備。(身頃の中心を合わせて着せ付けていない)
- ② 前端、裾、袖口が折られていない。(一部落ちていても×)
- ③ 衿または袖が付いていない
- ④ 構造線が違う。
- ⑤ 試験問題に記載された着丈や袖丈と著しく違う場合。

<地直し・布目>

地直し	①	地の目通りに線を入れ、縦横が直角になるようにアイロンをかける。 (シーチングの地直しが不完全なためにシルエットがうまく出せないこともある)
事前準備	①	適切な厚みや大きさのシーチングを正確に地直しし、しわの出ないように持参するよう心がける。
	②	試験前の準備がきちんとできていれば試験中の作業にも余裕が出来、より完成度の高い仕上がり期待できるように思う。

<身頃>

構成	①	原型操作の段階でダーツ量の分散が正しく行われていないときれいにシルエットが表せない。
	②	切替え線は、適切なラインが描けていないとピン打ちしても思い通りのシルエットにならない。切替えの位置やカーブ、上がり寸法を意識し、デザイン通りに描けるようしっかり練習して試験に臨んでいただきたい。
	③	今回のデザインは4面構成のパネルラインの切替え線であるため、バストダーツはパネルでイセて処理、後ろ肩ダーツは肩線でイセて処理することとなる。
ピン組立て	①	ピンの間隔や打つ位置もシルエットに大きく影響する。どこにピンを打つべきか、どのくらいの間隔でピン打ちするかよく考えて組み立てる。
	②	シーチングの縫い代を片倒しの状態にピン打ちする場合、どちら側を上に乗せるかについても正解があるわけではなく、結果としてシーチングが美しく表現されていればよい。 (一般的には片返し処理をして縫製するときと同じ方向に倒すことが多い。)

シルエットを表現する時に必要な箇所には、くせとりや縫い代に切込みを入れる。

縫い代処理	①	<p>前端や裾、袖口は出来上がりに折り、縫い代が出てこないようにある程度ピンで止める。</p> 
	②	折られていなければ未完成として不合格になるので注意する。
	③	後ろ中心の始末は模範解答のように左身頃の出来上がり線も写し伏せて縫い目として表現することが望ましい。縫い目として表現しない場合は、後ろ中心の出来上がり線とボディの中心線を正確に合わせ、ずれないようにピンで固定する。
	④	胸ぐせ処理のイセや肩ダーツ処理のイセは範囲を決め、適切ところで膨らみの表現がされるようにする。外れたところでいせるとシルエットが崩れる原因になる。
着付け	①	前中心・後ろ中心を合わせシーチングが着崩れないように、必要な箇所にピン打ちをする。固定するピンもどこに打てばシルエットを安定させて着せられるかよく考えてピン打ちする。
	②	ボディの肩にかけているだけのシーチングは完成していないと見なされるので注意する。

< ボタン (身頃) >

バランス	①	ボタンの大きさ・間隔がデザイン画通りになるように付ける。出来ればくり抜いたボタンを付けていただきたいが、直接記入してもよい。その時に、ボタン直径の○と付け位置の+を両方入れる。
表現	①	配点の対象ではないが、ボタンホールも記入し実物縫製した時の雰囲気表現できるようにしていただきたい。模範解答のようにボタンを上から付けると付け位置が隠れてしまうので、ボタンにも十字の印を入れるか、ボタンホールを身頃に記入し付け位置も明確に表現していただきたい。

<ポケット>

デザイン ① フラップの幅や長さ、小丸形状、傾斜など、デザインに沿ったものにする。

フラップは周囲に縫い代を付けアイロンでしっかり折る。その際、小丸の部分がきれいに折れなければ、ぐし縫いをし、折り代が浮き上がって来ないように工夫をする。出来上がりにカットしてしまうと形状が崩れてしまうので、**今後は出来上がりに切ったフラップに関しては、減点扱いにするので注意する。**



①

ピン組立て

② フラップ付けはなるべく出来上がりの際に小さくすくって身頃に付ける。くれぐれもピン打ちでポケットの形状が変わらない様に付ける。

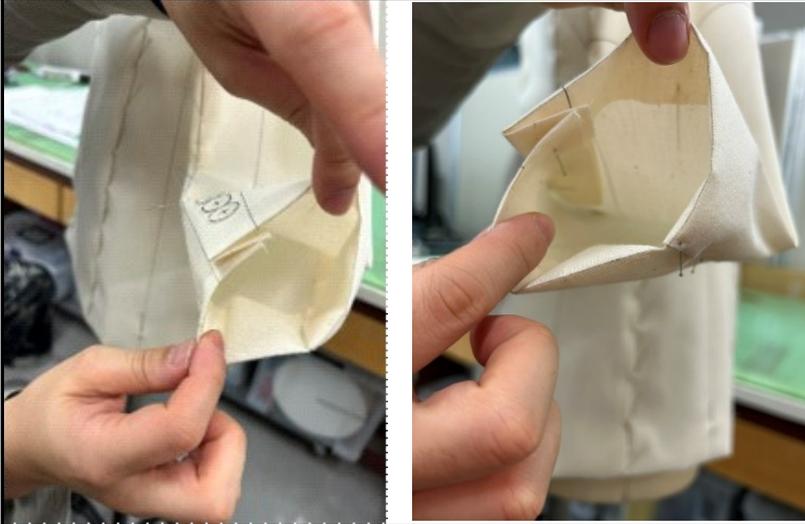
③ 今回のポケットを実物製作するときは、フラップをめくった下に片玉縁が付く。トワルの組み立ての場合、表から見えないので省略する。

< 衿・衿付け >

地の目	<p>① 衿の地の目はたて地、バイアス地どちらでもよいとされているが、地直しをしっかりと、ゆがみがないよう組み立てていただきたい。</p>
	<p>① 衿は衿付け止まりが判断しづらい場合は、パターン作成時に決め、設定どおり組み立てをして欲しい。そのためにはラベルにも、衿にも付け止まりの合い印を入れて正確に組み立てていただきたい。</p>
	<p>② 衿の外回りは縫い代を付けて裁断し、縫い代が浮き上がらないようにアイロンでしっかり折って組み立てる。今までは衿の外回りの縫い代は裁ち切りでもよいとされていたが、裁ち切りにしないで、必ず折って組み立てをして頂きたい。出来上がりにカットしてしまうと形状が崩れてしまうので、今後は出来上がりに切った衿に関しては、減点扱いにするので注意する。衿付け線のピン打ちは、縫い代を折り、縫い目線の際を衿付け線に沿って平行に止めるとよい。その際に、身頃の衿ぐりの縫い代が首につかえている場合は、切り込みをいれなじませてから衿付けをする。衿は返り線で返し、C.Bにピンで止めること。</p>
	<p>③ ゴージ線のおさまりが悪いと返り線にも影響が出てしまうため、ゴージ線の組み立てもラベルか衿のどちらか片方を折って縫い目線とし、きれいに組み立てをしていただきたい。</p>
ピン組立て	

< 袖・袖付け >

- ① 肘のくせを表現するためには、組み立て前に外袖のくせ取りが必要である。くせ取りがされておらず袖の形状が悪くなるので注意する。
- ② 袖口の明きみせの始末も不備（明かないもの、エッジ始末の不良）がないように、事前に確認しておく。



ピン組立て

- ③ 肩パッドが縫い代端まで届いていないものや前後片方に偏って付いているものは、安定した状態で袖付けがされず、見栄えが悪くなる。肩パッドはアームホールの縫い代に端から端までがしっかりと掛かるように設定し、はみ出した余分な部分はカットする必要がある。



- ④ 袖は体型上振りが必要である。作図の段階で振りが表現されているのはもちろんだが、袖を付ける段階でも袖が振れているよう付けなければならない。事前に練習が必要である。